

## 文學家西川滿戰後的日本天后會宗教活動之考察

### — 以《人間之星》為主要分析文獻 —

黃耀儀

台灣首府大學/助理教授

#### 摘要

西川滿是台灣日本統治時代的日人作家中最代表的人物，1930 年代至戰後返日，在台灣文壇極為活躍。他終其一生敬慕台灣媽祖，戰後創立日本天后會。

本稿的目的是以「文學與宗教」的比較文化研究的概念，從日本宗教社會學的角度，分析文學家西川滿在返日後，從事占卜活動，爾後成立「日本天后會」宗教組織的過程的行動原理。分析資料有二，其一是細述西川滿自己獨特的台灣式占星學以及走向占卜之路的自傳小說《人間之星》。其二是西川滿基於在台灣媽祖信仰經驗，創立的日本天后會的同名機關誌《人間之星》。

**關鍵字：**西川滿、宗教與文學、日本人的媽祖信仰

# 戦後における文学者西川満の宗教活動に関する一考察 —『人間の星』を中心に—

黄耀儀

台湾首府大学/助理教授

## 要旨

西川満は、台湾の日本統治時代の日本人作家の中で最も代表的な人物であり、1930年代頃から戦後日本引揚まで台湾文壇に風雲児的存在であった。西川満は台湾の民間信仰である「天上聖母」、「天后」の尊号と讃えられている媽祖の信仰に個人の生涯を捧げ、戦後、「日本天后会」という宗教組織を創立している。

本稿の目的は、「文学と宗教」の比較越境研究の概念を用いて、日本の宗教社会学の視点から、文学家である西川満が引揚後日本で占いに従事し、一人の宗教家にまでなった「占いの宗教的發展」における行動原理を分析することである。分析資料は、西川満本人の独自の占い方法が詳しく描かれている著作

『人間の星』及び彼自身が台湾における媽祖信仰の経験に基づき、創立した「日本天后会」という宗教組織の同名機関誌『人間の星』を中心にする。

キーワード：西川満、文学と宗教、日本人の媽祖信仰

**The investigation of litterateur Mitsuru  
Nishikawa's religious and literary activities after  
World War II -- to analyze “LES ÉTOILES DE  
L'HOMME”**

Huang Yao-I

Taiwan Shoufu University/ Assistant Professor

**Abstract**

Mitsuru Nishikawa is the most representative Japanese writer in Taiwan during the period under Japanese rule. He was very active in Taiwan's literary circles in 1930s even he came back Japan after World War II. Mitsuru Nishikawa was also a famous divinator. He respected Mazu ( one of Taiwan's gods ) throughout his life, he created “The Tanhou Kai” (the organization of Mazu's believers) in Japan.

The structure of this article based on the aspect of comparative culture “ literary and religion ”, the purpose is to interpret Mitsuru Nishikawa's motivation of his arts of divination and the consideration of his creation of religion organization . And moreover, to investigate the faith from divination to creation of religion organization .

This article was extracted from two major sources. One is Mitsuru Nishikawa's autobiography << LES ÉTOILES DE L'HOMME >>, a novel which described Taiwanese astrology and how he developed this astrology to his divinatory profession. The other one also called << LES ÉTOILES DE L'HOMME >>, official publications of "The Tanhou Kai".

**Key words:** Mitsuru Nishikawa, Religion and Literature, Mazu's faith derived from Japanese



## 戦後における文学者西川満の宗教活動に関する一考察

### －『人間の星』を中心に－

黄耀儀

台湾首府大学/助理教授

#### 一、はじめに

西川満は、台湾の日本統治時代の日本人作家の中で最も代表的な人物であり、1930年代頃から戦後日本引揚まで台湾文壇における風雲児的存在であった。引揚後の西川満は台湾の民間信仰では「天上聖母」、「天后」などの尊号で讃えられている媽祖の信仰に個人の生涯を捧げ、戦後「日本天后会」という宗教組織を創立している。

本稿の目的は、「文学と宗教」の比較越境研究の概念を用いて、日本の宗教社会学の視点から、天后会創立前の西川満が占いに従事して、後に占い師でありながら一人の宗教家にまでなった「占いの宗教的発展」における行動原理を分析することである。分析資料は、西川満本人の独自の占い方法が詳しく描かれている著作『人間の星』<sup>1</sup>、及び彼自身が台湾における媽祖信仰の経験に基づき、創立した「日本天后会」という宗教組織の同名機関誌『人間の星』<sup>2</sup>を中心にする。

---

<sup>1</sup> 西川満の『人間の星』(西川 1959)は西川満が日本で占いを開業する経緯を語っている自叙作品である。

<sup>2</sup> 機関誌『人間の星』は1961年から1974年まで全60号ある。第1号から第5号まで『聖母通信』という機関誌名であったが、第6号から『月刊人間の星』に改名した。

### (一) 西川満と媽祖

西川満（1908-1999）は、福島会津若松市に生まれ、父親の仕事の関係で、3 歳ごろ渡台し、1946 年まで台湾で作家人生を送っていた。1934 年に「媽祖書房」という出版社を創設し、同年に雑誌『媽祖』を発刊した。翌年 1935 年に詩集『媽祖祭』を刊行し、その後、1939 年に『臺灣風土記』や『華麗島』、1940 年に『文藝臺灣』などの雑誌を創刊し、活発な文学活動を行っていた。特に彼は 1930 年代の台湾文学を主導したといえるほどの作家であり、編集者でもある。文学作品の数は膨大であり、詩、小説、随筆、散文などが挙げられる。彼の文学の特色は、当時の写実主義的な日本及び台湾の近代文学の様式と異なり、異国情緒あふれる、ロマンティックな作風にある。

終世、日蓮主義<sup>3</sup>を信奉する父親である西川純の影響から、『長編叙事詩-日蓮聖人』（西川 1981）を著している西川満の信仰にも見られるが、台湾にいた頃、台湾媽祖の女神の姿が西川の心を引きつけていた。西川は日蓮精神を奉じながら、華人文化圏において広く信仰されている天上聖母媽祖をも熱心に崇拝している。

中国の近世において、航海の守護神として一般に崇められていた女神である媽祖は、宋代に実在した官吏の娘である林

---

<sup>3</sup> 日蓮(1222-1282) は日本鎌倉時代の仏教僧侶、日蓮宗の宗祖である。日蓮主義とは日蓮の妙法蓮華經至上主義の理念を中心にする一派の仏教思想である。

默娘が神になったとされ、16歳の頃に神通力を得て村人の病を治すなどの奇跡を起こし「通賢靈女」と呼ばれ、崇め奉られた。媽祖は、その初め福建の蒲田という一地方におこった民間信仰の一高神にしか過ぎなかったが、その信者に漕運や漁業に従事する者が多かったため、海運や通商の発展とともに、南宋以降、朝廷の寵遇をも得て、天子の尊号を与えられ、周辺各地の港町に、その信仰が急速に広まっていった。

清代には、航行するどの船にも、決まってその女神像が祀られ、各地の港町には必ず媽祖廟や天満宮などが建立され、盛大な祭がくり広げられた。台湾では、福建南部から移住した開拓民により、媽祖を祀って航海の安全を祈り、無事に台湾島へ到着したことを感謝するために台湾島内に媽祖の祠廟が建てられた。現在、媽祖はもっとも台湾で親しまれている神といえる。

鄭志明の研究によれば、台湾における媽祖信仰は、人と神とのコミュニケーションを主体にした宗教であり、人が神聖なるものを直感的に体験し、感情が通じ合うなど交感行動を認めている。媽祖信仰は台湾の仏教や道教のような具体的、制度的な修行法則こそ成していないが、民間の靈感経験の集大成とも言えるものである（鄭 2005:110）。また、人気の高い媽祖廟が主催している媽祖聖像の巡幸活動が現在台湾の媽祖信仰の重要な部分を成し、信徒が巡幸路線に立ち神輿にある聖像を拝むことで、願い事を叶え、悩みなどの問題を解

決してもらえるように、天上聖母との靈感交流を試みる。こうした媽祖信仰は、信徒の現世利益的志向性が強く、現世利益的、呪術宗教的性質を持つことは、台湾の民間信仰の特徴である。

幼い頃、線香の煙が満ちている寺廟の奥に祀られている半眼を見開き、赤い肩掛けをしている媽祖の姿は、台北の大稻埕という町で過ごした西川満の心を捉えた。この天上聖母媽祖の祀られている崇高、かつ精霊のような雰囲気以下のように描いている。

天蓋の下、聖母は烏面の分身を随へ、二魔に護られて、永遠の半眼を見開いてゐる。窃たる慈顔に藏されたこの世ならぬ微笑には、モナリザのそれも及ぶべくもない。東洋である。正しくこれは崇高な東洋である。靈通救世の御母よ、御身の徳を、病める児等のため形代焼く女たちに與へたまへ。内陣の奥深く、幾多の偶像、髪をおどろに亂し、舌を垂らした神々が悪鬼邪霊を捕へむと、彩旗ひるがへる出陣の日を待っている（西川 1936）。

「窃たる慈顔」、「この世ならぬ微笑」、「靈通救世の御母」など、聖母を讃える西川の敬虔な心が表れている。西川は天上聖母媽祖を敬慕し、初めての詩集を『媽祖祭』と名付けて、また、「媽祖祭」、「媽祖昇天」、「大天后宮之歌」、「天上



聖母」など、大量の作品を世に送り出している。

1946 年 4 月 7 日に日本へ引揚げた後も、貧しい生活の中、作品の執筆は中断せずに続け、作家西川満は後に 2 つの身分を持つようになる。一つは占い師であり、その後、宗教組織である「日本天后会」の「総裁」となっている。戦後、年少時から学んでいる「算命学」という中国式の占術法は、彼の生計維持の手段となった。西川は、自身の媽祖信仰の人生経験に基づき、自ら創出した西川流の中国算命学を、媽祖の尊称である「天上聖母」を冠し、「天上聖母算命学」と名づけている。張良澤の研究によると、1958 年 11 月 18 日、西川は東京都新宿で占い事務所を開いた。翌年 1959 年 7 月 1 日、鳥越神社水上祭を行ない、東京都阿佐ヶ谷の自宅の聖堂に天上聖母が降臨したとしている。1960 年 10 月 8 日、自宅に「祈りの宮」を建て、天上聖母を祀り、「日本天后会」を創立し、自ら「総裁」になった<sup>4</sup>。

自身が占い活動に従事する様子は、1959 年の『人間の星』という著作に見られる。1961 年に月刊『人間の星』（1961-1974、全 60 号）が日本天后会の機関誌として発行され、1962 年 7 月、出版社「人間の星社」株式会社を成立し、1969 年に同組織の機関誌である月刊誌『アンドロメダ』（1969-1993、全 292 号）が刊行されている。1999 年に西川満は 92 歳で亡くなった。元の天后会の所在地、聖堂がある西川満の阿

---

<sup>4</sup> 西川満の占い活動及び宗教活動に関して張良澤の研究にある西川満の年譜を参照した（張 2011）。

佐ヶ谷の自宅は西川満の長男西川潤（2018 年 10 月逝去）が住んでいた。聖壇として、聖堂の天井から懸けてある硝子容器内に置かれた媽祖神像は、現在、台湾の真理大学にある西川満文物室に所蔵されている。

## （二）先行研究と本稿の位置づけ

従来の西川満の研究は、その多くが作家の台湾に関する描写、その描写に用いる華麗な語彙、小説の芸術的技巧、台湾と日本を越境する作家の政治的立場など「エキゾチシズム」をその特徴としており、論述の多くは、「文学的観点」から分析されている。その中で、作家の信仰に関する数少ない先行研究として、陳藻香氏の研究（陳 2002:15-36）と呉春霞氏の研究（呉 2012）及び徐禎苓氏の研究（徐 2013）がある。この3つの研究は、主に戦前、台湾で文学活動をしていた時の西川満の作品を分析対象としている。そして、前述のように媽祖に対する作家の描写内容から「エキゾチシズム」、つまり台湾的要素（台湾の人、時、地、事、物）を抽出し、「文学的観点」から論述する方法をとっている。しかし、これらの研究では戦後日本で文学活動によって貧困生活から抜け出した頃に作家の精神を支えた媽祖信仰、彼が創設した「日本天后会」の組織及び「天上聖母算命学」（占い）に見られる作家の宗教的側面についてはあまり深く考察されていない。すなわち、これらの研究は西川本人の信仰観である彼の媽祖描写を通して、これを台湾の信仰

文化と対比しつつ、日本人作家が理解した台湾像を探ることが中心になっている。

そのため、本稿は先行研究であり考察されてこなかった西川満の「占いの宗教的発展」における行動原理を解明することを目的としている。分析する文献を著作『人間の星』と日本天后会の同名機関誌『人間の星』月刊とし、宗教社会学の視点から、戦後占い活動に従事すると同時に一人の宗教家にまでなった西川満の「占いの宗教的発展」における行動原理を分析している。

## 二、『人間の星』について

『人間の星』（西川 1959）は、西川満が年少時、台湾で中国の「算命学（占術）」を学び、日本で占いを開業するに至る人生を描いた自叙作品である。作品の中で、年少時の西川満は、紋付を着た日本の易者より、台北の大稲埕の歩廊の一角で、風にゆれる仄暗い蠟燭のあかりを頼りに運命を占う「算命老人」に心を惹かれる様子が描かれている。これをきっかけに命運学に興味を示し、人のさまざまな苦悩を解くまでになった経緯が示されている。

### （一）算命学（命運学）の主張と技法

西川満は、『人間の星』において、「いかなる星のもとにわれわれ生まれけむ」という日蓮主義に転向した高山樗牛のこと

ばを借り、算命学の重要性を説き、以下のように強く語っている。

動かしがたい先天的な宿「命」をしり、めぐってくる後天の「運」の波を巧みに用い、未然に不幸をふせぐひとの頭上にこそ、成功の栄冠は輝くのであり、それを教えるのが命運学なのである（西川 1959:18）。

そして、西川は「人には一人一人、生まれた日の星があるにちがいない。その星を、わたしはさがしてみよう（西川 1959:56）」と語っている。それはどのような占い技法であろうか。『人間の星』では、西川満は自分の占い技法を「天上聖母算命学」<sup>5</sup>と呼び、中国の易、黄道などをもとにして自分で編み出した技法であるとする。ちなみに、中国の「算命」という言葉は、「運命を算出する」ことを意味し、占術全般を指す用語である。西川の「天上聖母算命学」とは、人の運命を「生年月日」により判断・占う方法である。人の運命は「運命星」・「相性」・「運命周期」によって支配されているため、生年月日から人の「運命星」が決定する。

西川満の技法は、10 分類（主星）×12 分類（従星）の組み合わせで、日本の四柱推命に近い。10 大主星は、北冠、五車、

---

<sup>5</sup> 『人間の星』の「天上聖母算命」という篇において、西川満は師匠である「呂先生」から伝授した算命学が、「実に「天上聖母算命学」なのである」と称している（西川 1959:93）。

南斗、北落師門、昴、織女、天狼、牽牛、大火、北斗であり、12 大従星は、西洋のことばを使い、アルクトウルス、スピイカ、アルデバラン、南コロナ、ペテルギウス、ラス・アルゲティ、リゲル、ポルックス、カストル、アケナル、デネブである。

運命星は基本的に上記の星であり、人は生年月日から割り出された当該運命星の影響・支配を受ける。ある運命星のもとに生まれた人は、当該主星の影響下にあるがゆえに、その星と同様に特徴づけられることになる。例えば、西川は歴史的人物の実例を挙げ、それぞれの主星を「天上聖母算命」で算出すると、法然の主星は「寂莫たる北落師門」、親鸞は「北天第一の輝星・織女（ヴェーガ）」、道元は「鉄の意志を誇る貫索（北冠）」であると記している（西川 1959:231）。また、それぞれの星の間には「相性」がある。例えば、「五車」人と「天狼」人とは相性が悪く、この悪い相性が各々の人の運命に影響を及ぼす。

また、運命に影響を及ぼすのは運命星における相性だけではない。「天上聖母算命学」の重要な部分は、「天中殺」と呼ばれる不運期というものである。西川によれば、「年では十年目ごとに満二ヶ年、月では十ヶ月目ごとに満二ヶ月、日では十日目ごとに満二日間、めぐってくる。この期間を中国では「天中殺」といい、フランスでは「ケアン」(néant)という」(西川 1959:183)。この「天中殺」の時期は不幸や災難が集中して訪れる運気がマイナスへと転じる時期である。これは当該人間の

宿命であり、それからけっして逃れることはできないものである。そして、天中殺の時期は、何か事業や生涯の新たな発展を始めてはならない時期、あるいはそれ以外の時期に得たものを吐き出す時期であり、それらに反するようなことをすれば、損失、被害、災いなどの不幸を招いてしまうという主張である。

種田博之の研究によれば、占いは、日本社会から見れば、「周辺の」ないし「逸脱的」な知識であると一般的に考えられている<sup>6</sup>。こうした状況から、人々の占いの受容は安定性を欠く。すなわち、占いはいつ何時人々に拒絶されても不思議ではない状況におかれているのである。このような現状が恐らく当時の西川にも影響していたのであろう、占いを正当化するため、作品において、自身の占い法を羅針盤とし、気象科学的なものに例えることなど、頻繁に科学的要素や喩えを用いている。

こうして、本来「周辺の」ないし「逸脱的」な知識である「占い」にその対極的な立場である「科学」の知識を取り入れるなど、占いに対する一般認識への西川の対応的な言説が見えてくる。さらに占いを正当化するために、宗教的な概念を活用したことは、彼の「占いの宗教的发展」における特徴的な行動

---

<sup>6</sup> 種田博之は「こころと暮らし」という全国世論調査（1991.12）において「占いを信じていない人」の割合が約7割にも達しているといった例を挙げ、占いは今日の日本社会から見れば、あくまでも周辺のないし逸脱的な知識でしかないと指摘している。（種田 2000：145）

原理である。西川は自らの「占い」に「正しい信仰」という概念を取り入れる。

## （二）算命学と「正しい信仰」

著書『人間の星』において、媽祖に関しては台湾の一般的な媽祖象とは異なって、西川独自の唱えている、西洋のマリアと一体化した天上聖母像を次のように語っている。

「媽祖」一実は、「瑪利亜」。「マリア」中国に降臨して「マソ」となる、ということだ。〈略〉西欧では、処女崇拝、マリア信仰のいちじるしかった時代である。「黙示録」には、「日を著たる女ありて、その足の下に月あり。」とあるが、錨はこれを象ったものであり、当時、船のへさきには航海安全の守護神としてマリア像をつけた。この西欧の船が、航海術の発達にともなって、東洋にくるにつれ、マリア信仰は東漸し、たまたま、「黙娘」（媽祖生前の名、林黙娘：筆者註）という現実の少女に結びついて、中国独自の媽祖信仰が発生した。わたしはそう信ずる（西川 1959：84-85）。

そして、西川本人が占い技法を名付けた「天上聖母算学」は「これをいいかえれば、「マリア占星学」ではないか」と語っている(同上 95)。

実際には、著書『人間の星』において、九割の内容は「天中殺」（人生の不運期）を核心とする西川自身の算命学が語られ

ており、全体の 287 頁の中に媽祖に関する内容はわずか 17 頁しかなく「天上聖母算命」という篇に限られていて比重的には少ない。この 17 頁のほとんどは、中国の歴史上における媽祖の位置づけに関する文献的論述の描写であり、後の機関誌における権威的至上神の存在のような内容は書中に見当たらない。それに対して日蓮の教説や精神は、ほぼ作中の全篇において大いに語られている。作中、台湾で出逢った算命老人の話を借りて、算命学を真摯に受けとめるとともに「正しい信仰」の重要性を次のように書いている。

算命の学問は、人の命運をあやまちなく予知できるが、本来、非情なものだ。凶を吉に変えるには、また別な方法をとらねばならぬ。一番よいのは、正しい信仰をもち、実践することだ(同上 64)。

さらに「日蓮聖人は世界の人類の心に涙し、人類の心を法華経によって解明した」、「〈立正安国論〉は宗教文学として、和漢印度に類型のない、世界大文学の一つだ」などと記している(同上 64)。また、作品において「十二因縁御書」、「開目鈔」など日蓮が書いた書物を取り上げ、「聖人」の教説を用い、自分の運命学の合理性を高めようとした。さらに西川のいわゆる「正しい信仰」は「唯真道」であり、「「唯真道」—それは、「天上聖母算命学」の日本語的意識であり、法華経への道でも



ある(同上 173)」という、なお、この「唯真道は人間の命運を知って、万人を幸福にする学問(同上 279)」である。媽祖にあまり触れていない著書『人間の星』だけをみれば、媽祖よりは日蓮精神のほうが当時占い師を勤めていた西川満の信心を支えていたのではないかと考えられる。

しかし、1959年6月29日、文学者西川満の占い師としての命運学生涯を物語っている『人間の星』という自叙伝を発行してまもなく、翌年1960年10月8日、自宅で「日本天后会」を創立した。『人間の星』の中、「算命先生（占い師）」である「西川先生」の信心を支えた日蓮と、後に天后会の「西川総裁」に主神として奉じられた天上聖母媽祖の両者は、西川にとってどのような関係にあったのであろうか。

両者の関係に関して、機関誌『人間の星』第10号において西川満は「終世、日月星辰をあがめ、久遠の生命を説いた日蓮聖人の靈山に、それを嘉し給うた宇宙神・天上聖母が降臨した事実を思う」（機関誌『人間の星』第10号：7-8）、さらに「日蓮聖人は、われを本仏にせよ、とはたまわぬ。釈尊また、われをあがめよ、とは申されぬ。聖キリスト、聖マホメットまた、礼拝の対象は天にありとした。孔子またしかり、老子またしかり。ああ、天。天にありて広大な宇宙の星を支配し給う天上聖母。東洋と西洋との神々の御母。人類のすべてを、その一人一人の命運を支配し給う十善美貌の御母」（同上 8）と書い

ている<sup>7</sup>。

この内容からみれば『人間の星』（1959）にはあまり触れられていない媽祖は、日本天后会の成立後にその機関誌『人間の星』において西川の運命学を正当化する靈驗威力を持つ至上神になったと考えられる。『人間の星』（1959）に大いに語られている日蓮は西川満にとって歴史上実在した偉大なる宗教家（人間）である。これに対し、台湾在住時代に敬慕している「靈通救世の御母」である天上聖母媽祖は人間の禍を福となす靈驗的威力をもつ永遠なる至高神である。両者は西川にとって補い合う両立的な存在であると考えられる。だが、二つの文献における媽祖の位置づけに関する言説を分析すると、そこに明らかに占いへの宗教的権威の導入があったことがわかる。

上述のように、占い自体は日本社会において一般的には「周辺の」ないし「逸脱的」な知識であると考えられている。すなわち一般的には「非合理的」な行為であると認識されている。よって、西川は著書『人間の星』において、中国算命学や易学や占星学から成した「天上聖母算命学」を「天文学」、「算術法」、「舵」、「羅針盤」などの科学的用語と共に度々用いて、「占い」を科学的学問であるように主張した原因ではないかと

---

<sup>7</sup> 機関誌において西川満の「星への祈りと七面天女」という篇がある。「星への祈り」は日蓮を指し「七面天女」は媽祖を指す（機関誌『人間の星』第10号、1962.7：4-8）。

考えている。また、作中、自身が編み出した算出法による歴史的人物、当代著名人の占いの内容が、実際に発生した事実と正確に一致している実例をたくさん挙げたのも、彼の天上聖母算命学の「合理性」、「学問性」、「権威性」を求めようとした苦心の表れであろう。

西川満が台湾在住時代から敬慕している靈驗的な台湾媽祖を、西洋のマリア信仰に一体化したのは、台湾における土俗的呪術的また現世利益的印象が強い媽祖信仰に、近代化と合理主義を代表する欧米のキリスト教的要素を取り入れることで、自身の占いがより合理的であり、正当的信仰であるように転換するよう努めた傾向が見られる。

このような行動には宗教社会学的な意図が介在していると思われる。次にこうした「占いの宗教的發展」の経緯にあらわれた西川満の行動原理を、西欧及び日本の宗教社会学の視点を用いて分析したい。

### 三、宗教社会学の視点からの考察

『人間の星』（1959）における西川満の占いにおける宗教的發展においては、二つの重要な概念、「呪術」と「宗教」が関係している。西川の称える天文学の一種である「天上聖母算命学」の星占いは、西川にとって、また日本天后会の会員にとってなくてはならぬご神託であり、超自然的、神秘的な力の働きを信じる呪術の一環である。ただし、作中、彼は命運学に科

学的合理的な色彩を施そうとした努力も見られる。一方で、「呪術」と「宗教」とがどのような関連性を持つのかという問題が生じてくる。呪術と宗教との関連性に関する研究には、多彩な学問的蓄積がある。ここでは、宗教社会学の学者による「呪術と宗教」に対するさまざまな見解を踏まえて、西川満の「占いの宗教的発展」の経緯にある行動原理を解明したい。

### (一) 西洋的な宗教社会学の見解

まず、日本では社会経済学者としてよく知られているマックス・ウェーバーの見解を取り上げる<sup>8</sup>。呪術と宗教について、ウェーバーは呪術的行為と宗教的行為を合理性のある行為として、それぞれ「目的合理的行為」、「価値合理的行為」の範疇に分類した。両者の関係に関して、ウェーバーによれば、価値合理的行為は「或る行動の独自の絶対的価値観—倫理的、美的、宗教的、その他の—そのものへの、結果を度外視した、意識的な信仰による行為（ウェーバー 1972：39）」とされている。絶対的価値観から演繹される信仰によって、目的達成を度外視しても遂行する行為である。「価値合理的な行為（すなわち宗教）とは、つねに、行為者が自らに向けられていると信じる『命令』に対する、あるいは『要求』に従う行為」であり、「行為の独自の価値（純粹

---

<sup>8</sup> マックス・ヴェーバー（Max Weber）はドイツの政治学者・社会学者・経済学者であり、宗教社会学の分野で『宗教社会学試論』『儒教と道教』『ヒンドゥー教と仏教』『古代ユダヤ教』など、多くの著作を残している。

な信念、美、絶対的な善意、絶対的な義務感）だけが心を奪うようになると、価値合理性は、ますます行為の結果を無視するようになる(ウェーバー 1972 : 40) 」のである。つまり、価値合理的行為は、ある価値を前提とし、目的達成を度外視してまでも遂行される行為である。ここに、ある目的を達成するための目的合理的行為（すなわち呪術）との差異が存在している。すなわち、呪術がある具体的な目的達成（現世利益）を目指す行為であるのに対して、宗教は目的達成という結果を度外視する行為である。

また、呪術を宗教化した過程にあらわれた行動原理に関しては、R. スタークと W. S. ベインブリッジの研究を取り上げる。文中において、スタークらは占いを「世俗的呪術」と述べている。スタークらの見解によれば、「呪術の宗教的発展」は「個別の一般への発展」という概念でとらえる。呪術は、例えば「病氣平癒」、「事業繁盛」、「良縁成就」、「合格成就」のようにある個々特定の具体的な目的が達成されたかどうか確認されるため、失敗した場合であれば、呪術の正当性や主張が反論されることになる。それに対して、宗教は例えば「自己実現」、「幸福な生活」などの一般的な形で、その目的を措定し、その目的が具体的というよりも一般的（上述のウェーバーの論理だと、純粋な信念、美など価値合理性）であるために、反論されにくいと言う(Stark & Bainbridge 1985)。したがって、呪術が疑問を持たれない

ように、目的を個別具体的なものから一般化しなければならず、ここからスタークらは呪術は宗教へと展開していくことになるとしている。

## (二) 日本の宗教社会学の見解

『人間の星』に見られる西川満の天上聖母像には台湾在住時に崇敬していた東洋の聖母媽祖、及び西洋の聖母マリア両方の存在がある。また、作中における彼の宗教的行動は呪術（天上聖母算命学）と宗教（天上聖母の信仰）が不可分的な関係であるように見られる。本人も日本天后会の創立後、占い師である「西川先生」と宗教の指導者である「西川総裁」二つ身分を持っている。呪術と宗教の関係については、競合なのか共存なのかという日本の宗教社会学における、様々な見解がある。上述したウェーバーとスタークの論述は、西洋キリスト教世界の近代合理主義に基づき、「宗教はいかに近代化に貢献し得たか」、「合理的・倫理的なもののみを宗教的と見なすべきか」という問題意識により、「呪術からの解放」という「呪術」と「宗教」の概念を峻別する傾向があると考えられている。こうした西洋的宗教社会学の論述は必ずしも日本人の宗教的性格と一致しないと、日本の宗教社会学の学者は指摘している。日本においては、欧米社会と異なり、近代化の過程が進む中でも呪術的志向性が一貫して保持された、あるいはより強化されたという傾向があると考えられている。

例えば、沼尻正之氏は、西洋においては脱呪術的な志向性を強くもった成立宗教あるいは歴史宗教が、呪術的で現世利益的な民俗宗教・民間信仰を凌駕していったのに対して、日本においては反対に仏教などの外来の成立宗教は民俗宗教と習合し、むしろその中に取り込まれていくというプロセスをたどったと述べている。そのため、彼は、現代新宗教における「癒し」の事例（例えば多くの新宗教団体では呪術における「体の癒し」と宗教における「心の癒し」が共存すること）を検討した。そこから、宗教と呪術を異なる二つのカテゴリーと捉える西洋的な宗教社会学の議論からは見えにくい、日本的な民俗宗教のあり方に由来する宗教と呪術との相互浸透性を持つ日本宗教の文化的特性が明らかになったと論じている(沼尻 1996 : 123)。

また、大西克明氏の研究では、ウェーバー式の「呪術：目的合理的行為／宗教：価値合理的行為」という対立軸によって分析される二分法的な分析視角を検討し、日本社会における現世利益<sup>9</sup>の宗教的合理化を探求している。大西は現世利益が利益を得ようとする目的合理的行為に配置され、価値合理的行為とはみなさないウェーバー式の論説との対比で考察した結果、現世利益の宗教的合理化の把握は、目的合理的でありかつ価値合理的である相を有するからであるという結論を

---

<sup>9</sup> 現世利益とは、宮家準によれば「人間が超自然的な存在との関係を通して、日常生活上の諸問題に関する直接のおかげを得ること」と定義している(宮家 1974 : 131)。

出している。これによって、日本の宗教的行為には呪術と宗教と両方を持つ重層的あるいは多元的な構造を持つことが明らかになったという（大西 2007：155）。

沼尻と大西の研究から、「呪術からの解放」という西洋の近代合理主義的立場から呪術と宗教を対立するものと捉えるウェーバーらの西洋的な宗教社会学の議論に対して、日本の宗教社会学では民衆は一般的に現世利益志向性が強く、呪術と宗教との相互浸透性を持つ宗教文化の特性があらわれていると示している。

なお、西川満の『人間の星』は、命運学を詩的、文学的な描写で語り、文学作品と考えられているが、作中、占い技法、特に天中殺の算法を詳しく書いているため、一種の「占術書」と見なしてよい。「占術書」は、占い師が社会の人々に自分の占い説を広める道具の一つでありうる。上述したように、占いは一般的に周辺的かつ逸脱的なものと認識されている。よって西川は人々に自分の占い知識を「正当な信仰」のように承認させるため、様々な工夫をしなくてはならなかった。西川は『人間の星』において、命運学を「天上聖母算命学」と称し、天上聖母媽祖、西洋聖母マリア、日蓮を語っていることは、自身の占いにある権威的なものを取り入れようとする行動が見られる。このような行動に関しては、鈴木健太郎氏の研究を取り上げよう。鈴木は明治から昭和初期の「占術書」について考察し、尾島碩聞、高島嘉右衛門などの占い師



が信憑性を得るために、著名人に序文をよせてもらったり、古典を引用したりして、既存の権威を利用していることを明らかにし、これらの行動により、占いに信憑性を付与しようとしていたことを指摘している<sup>10</sup>。

### (三) まとめ

以上、宗教社会学者による「呪術」と「宗教」両者に対する定義、及び両者の関係をめぐる見解から、西川満の「占いの宗教的發展」の行動に関わって以下の三つの点を整理することができよう。

第一に、M.ウェーバーは呪術を「目的合理的行為」に、宗教を「価値合理的行為」と定義し、呪術がある具体的な目的達成を目指す行為であることに対して、宗教はある偉大な信念、倫理観、絶対的使命感などの行為の独自の価値を介在させ、人々に度々目的達成という結果を度外視させる行為であると示している。そして、スタークらは「呪術の宗教的發展」を「個別の一般への発展」という概念によって、呪術が「病氣平癒」、「事業繁盛」など、特定の具体的な目的を追求するために科学から根本的な挑戦を受けなければならない場合があるのに対し

---

<sup>10</sup> 高島嘉右衛門という人物は明治中期から末期にかけて活躍していた占い師である。鈴木は「高島」という名称は当時の占い界で商標名となり、その結果、高島嘉右衛門以降の占い師の多くが権威を呼び入れるために「高島」の名称を利用していると指摘している。（鈴木 1996 : 233）

て、宗教は「幸福な生活」など一般的な目標を目指していることによって、科学による立証も反証も比較的に不可能とされる領域であると捉えている。以上の二人の見解から、呪術から宗教への発展には、呪術に対する「反論回避」という効果をもたらすことが考えられる。

第二に、呪術と宗教の両関係について、沼尻正之氏と大西克明氏は、呪術と宗教を対立的に見るウェーバーらの西洋的な宗教社会学の議論に対して、日本社会においては、宗教の合理主義的な近代化にもかかわらず、民衆は宗教に対して神仏など非日常的な力による生活上の諸問題の解決を求めている非合理的な現世利益の希求が強いという現状があると考えている。そして、それこそ、呪術と宗教との相互浸透性を持つ日本の宗教構造であると述べている。よって、西川の行動原理を宗教社会的に考察すると、そこに「現世利益による呪術と宗教との相互浸透性」を見出すことができると言えよう。

第三に、西川は『人間の星』において、命運学を「天上聖母算命学」と称し、天上聖母媽祖、西洋聖母マリア、日蓮を語っており、権威的なものを取り入れる行動が見られる。これは鈴木健太郎氏が考察を通して指摘した通り、占い師が信憑性を高めるため、「既存権威の利用」という操作を行う一つの例であると言えよう。

以上の考察から「反論回避」、「現世利益による呪術と宗教との相互浸透性」、「既存権威の利用」という宗教社会学を視

点とした三つのキーワードを見出すことができよう。この三つを西川満の行動原理に当てはめると、日本天后会の機関誌である『人間の星』を通して、西川満がなぜ「占いの宗教的発展」を目指したのか、その行動原理を解明することができる。

#### 四、機関誌『人間の星』にあらわれた西川満の宗教的行動原理

西川満は、1960年、自宅で「日本天后会」を創立し、翌年、機関誌『人間の星』を1961年から1974年にかけて全60号出版している。その間、定期月刊のほかに同名の「人間の星」を用いる別冊、特集のような刊行物もある。機関誌において、西川満の算命学教説、天上聖母の神観、会員の感想投稿のほか、西川の小説、詩作、随筆などの文学作品をも掲載している。ここでは、呪術と宗教との関連に焦点を当て、上述した宗教社会学者の「反論回避」、「既存権威の利用」、「現世利益による呪術と宗教との相互浸透性」の視点から、機関誌に見られる西川満の宗教的行動原理とその信仰世界を見てみよう。

自叙伝著作『人間の星』（1959）において、西川は「天上聖母算命学」の法則を用い、日蓮、法然、親鸞など歴史上の宗教家を取り上げ、彼らの生涯に起こったことが、それぞれの運命星と天中殺の相互作用によるものであると語っている。このような工夫は、西川が独自の占星説の合理性を高めようとする狙いがあるとみられる。また、同様に、機関誌『人間の星』の

別冊<sup>11</sup>において、フランスの作家フローベール（1821-1880）、モーパッサン（1850-1893）、オランダの画家ゴッホ（1853-1890）、日本の芥川龍之介（1892-1927）などの当代有名人物をも取り上げて、西川流の宿命決定論(天中殺説)を巧みに説いている。これが一種の「既存権威の利用」であろう。こうした論理は、占い技法を上手に売ろうとするのと同時に、日本社会において占いが非日常的、超自然的力を操作するような呪術の一環と見なされ、周辺の、非合理的なものであると意識されていることに対して、合理性かつ信憑性を有すると認識させるための操作であると考えてよからう。

また、西川満は日本天后会刊行の『天上聖母萬年曆』において、「いかに人間の叡智が発達しても、科学が進歩しても「天中殺」の現象を無視するわけにはいかない」、「秋の次に、冬がくるように、「天中殺」は必ず、誰でもめぐってくる。これは天の摂理である。もがいても避けようとしても、それはのがれるわけにはいかない(西川 1963 : 21)」とし、人間は生まれつきの「天中殺」という不運期を逃れられないため、その天中殺期間には何らかの事業や生涯への新たな発展を控え、次回の算定された発展期を待てば、人生の順風期を迎えることができると強調している。だが、そこに占い師なら共通的な懸念を抱

---

<sup>11</sup> この出典は、人間の星社出版の機関誌『人間の星』ではなく、占星学を主題にする日本天后会出版の同名の別冊のような刊行物による（西川 1962）。

くであろう。それは、彼らが元々想定（算定）していたことと実際に発生することは必ずしも一致しないことが有り得るということである。例えば、新たな発展が順調に起こるはずの幸運期には実際には起こらず、逆に不運期に事業が盛んになることなどは、占い師の算定した予言が失敗したことと見なされる。それに対して、依頼者に実際の目的達成を度外視してもらうために、大きな工夫をしなくてはならない。

スタークらが捉えている「呪術の宗教的発展」と「個別の一般への発展」という論点から考察してみよう。「西川総裁」の日本天后会成立自体は、「個々に対する占い活動」を「一般化した宗教活動へ」という行動原理であった。そのために彼の台湾時代から崇敬している天上聖母媽祖を迎え、これを彼の算命活動の支えとして呪術の宗教的な発展、個別の一般への発展を目指さなければならない。これは「反論回避」であり、そのための「既存権威の利用」であると言えよう。西川満は個々人の生まれつきの厄介なものである「天中殺」に対して、「それでは、避けられない「天中殺」の、大難を小難にし、禍を福となすほうがあるかといえ、それは日月五星・全天の星を支配する天上聖母さまの加護を仰ぐ以外、救われる道は、他に絶対はないのである（西川 1963:22）」と説いている。そして、『人間の星』月刊の別冊において、次のように唱えている。

では、「天中殺」にはじめたことは、どうにもならず、

またわるいことばかりあるのか。それを避け、幸福を招く秘法はないのか？

もちろんある！わたしの長男は、「天中殺」の年と月とがかさなった時に、日仏学院に於て「フランス大使賞」と「日仏学院賞」を受けているし、次女は次女で、「天中殺」の年に自動車免許がとれている。何もわたしの家だけではない、熱心に天上聖母さまを信仰し「星符」をいただく日本天后会の会員は、「天上聖母をねんずれば、禍転じて福となる」の「天上聖母真経」の金言どおり、「天中殺」にもろもろの至福を受けている（西川 1962:10-11）。

以上の内容から西川総裁の内心を推測してみよう。西川は不運期のはずの時でも良き結果をなしたことは、天上聖母の御加護をもらったからこそであると説いている。それに対し、不運期に禍転じて福とならないこと、あるいは逆に幸運期のはずの時でも良き結果がなかなか回ってこないことは、天上聖母を信仰していないことに原因があるかもしれないと、西川総裁が会員あるいは読者に示したかったのではないかと読み取れる。そこで西川総裁が気になるのは、依頼者の目的が達成されなかったという結果から「反論」されそうになる場合に対してどのように「回避」できるかという点であろう。そのため、台湾人にとっては靈驗的色彩が強い台湾媽祖を借りて、絶対的至高神として日本の依頼者たちに押し出すのである。そして、天上聖母

媽祖に祈願するようになった依頼者たちは、占い師である西川の信者になる。こうして、呪術を権威的要素を持つ信仰という行動へと宗教的に発展させることによって、依頼者の西川への様々な依頼解決という当初の目的達成は、天上聖母への信仰という要素が加わることで、その目的が度外視される可能性を、西川は考慮に入れているだろうと考えられる。

もちろん、上述した「反論回避」、「既存権威の利用」の原理を「呪術の宗教的発展」の過程に必要な手段として巧みに使っている西川満ではあるが、完全に「反論回避」を目的として日本天后会の宗教組織を作ったわけではないだろう。なぜなら、彼の算命学の信憑性は高いと考えられるからである。西川満は日本の占い業界にもかなり知られている人物でもある。現在、日本における中国から伝来してきた算命術は二つの流派がある。一つは、高尾義政氏家系統の算命学であり、もう一つはこの西川満の台湾系統の「天上聖母算命学」である。そして、多くの天后会会員が占い師である西川の元依頼者であったことが機関誌からわかる。

機関誌『人間の星』第 10 号と第 17 号<sup>12</sup>に記載されている会員投稿の内容からみれば、「西川先生」の算定した不運期である「天中殺」をうまく避けた結果、荒巻成光氏（第 10 号：

---

<sup>12</sup> 機関誌『人間の星』第 10 号、日本天后会編集、東京：人間の星社、1964.5.23。機関誌『人間の星』第 17 号、東京：人間の星社、1962.7.23。

16) と島村雅則氏 (第 17 号 : 26) が仕事や事業に順調期が訪れたこと、戸田ふみ氏が盲腸手術を無事に終えたこと (第 17 号 : 26)、平野とみと氏が胃痛を起こさなかったこと (第 17 号 : 26) などが、実際に起こったことがわかる。

病、祈願成就など人生の悩みに関するものばかりの上記の会員の投稿からみれば、彼らの天后会への信心は現世利益的信仰を中心に行っているといつてよからう。上記の天后会会員が元々は西川の占いの依頼者であったことは、当時の西川満の算命学の信憑性を認めた上で入信したからであると考えられる。しかし、単に占いや呪術的な方法で实际的にすべて解決しようということは、そもそも無理があるであろう。そこで工夫しなければならないのは、現実的な段階での「解決」ではなく、人の心理転換、精神向上などができるような言説、あるいは神聖的存在 (神仏、教祖など) を提供することである。例えば、天后会会員の松山浩子氏は機関誌において「西川先生」の「お言葉」、聖母の守護によって、以前の明るい心を取り戻しつつあるという感想を述べている (第 10 号 : 15)、また、中山策雄氏は、歯の痛みがあった際に「南無天后天上聖母元君」と唱名を繰り返し、また読経を続けていると痛みが消えてしまうという (第 17 号 : 15-16)。会員の投稿によれば、彼らの信仰世界における天上聖母への信仰には、組織のリーダーである西川総裁も介在していたと見られる。

1960 年に西川が天后会を創設した当時は、ちょうど新しい



宗教団体の活動が著しく拡大を始めている年代である。かつての新宗教の入信動機は、「貧・病・争」といった精神的苦痛が多数を占めていた。しかし、井上順孝によれば、戦後の高度経済成長期の終盤を迎えるころから、入信動機に精神的な満足や充足を求める割合が増えている(井上 2009:125)。その苦痛を現世内に解消しようとするのが、現世利益信仰の中心であるといつてよい。そこでは何らかの呪術的儀礼により、そうした苦痛の解決、あるいはその要因を除去することが行われるというのが、一般的に考えられていることであろう。そのため、宗教的達人にとっては、呪術的行為が現実的な効果をもたらさなかった場合に対して、その対応の仕方を考えなければならない。

以上の通り、著作『人間の星』及び同名機関誌を通して、西川満の宗教活動では、現世利益の希求をめぐって「天上聖母算命学」の呪術的な占い活動と「正しい信仰」である「天上聖母の信仰」の宗教的活動の両方を重要視していたことがわかる。霊驗的な媽祖信仰という宗教的資源は依頼者の現世利益希求に対応する西川の算命活動の重要な支えとして活用されている。こうした「占いの宗教的発展」の過程にあらわれた西川の行動原理は「現世利益による呪術と宗教との相互浸透性」を持つ当代の日本人の宗教的特性への彼の対応であるといえよう。

## 五、おわりに

本稿は、宗教社会学の視点から「反論回避」、「既存権威の利用」、「現世利益による呪術と宗教との相互浸透性」という三つの概念を用い、西川満の著作『人間の星』と日本天后会の同名機関誌を通して、彼の「占いの宗教的発展」の経緯における本人の行動原理を検討してきた。

西川満はこのように「占いの宗教的発展」において「反論回避」、「既存権威の利用」の原理を必要な手段として巧みに使っている。そして、資料分析を通して、西川総裁が主導した日本天后会の信仰形態では、現世利益希求をめぐって彼が称えている科学的合理的な学問である「天上聖母算命学」の呪術的な占い活動と霊驗的、権威的な「天上聖母の信仰」の宗教的活動の両方が重要視されていることがわかった。こうした西川総裁の行動原理による日本天后会の成立は「現世利益による呪術と宗教との相互浸透性」を持つ当代日本人の信仰形態の特性、または、「天上聖母」などの超越的存在を絶対視する「非合理性の復権」という、当代日本の宗教発展における傾向を反映していると考えている。

## 参考文献：

1. 陳藻香(2002)「西川満與媽祖」、『後殖民主義-台灣與日本論文集』、台北：台灣大學日本語文學系、pp.15-36。
2. 鄭志明(2005)『宗教組織的發展趨勢』、台北：大元書局。
3. 張良澤(2011)『図録 西川満先生年譜』、台南：秀山閣私

家藏版。

4. 吳春霞(2012)『西川滿作品中台灣民俗信仰及浪漫唯美色彩』、台中：中興大學台灣文學與跨國文化研究所修士論文。
5. 徐禎苓(2013)「南國再現・神秘現代—試論西川滿小說中的媽祖編寫—」、『我的華麗島：西川滿學術論文發表暨座談會論文集』、台南：台灣真理大學台灣文學資料館、pp.151-161。
6. Stark, R.&W.S.Bainbridge, *The Future of Religion*, Berkeley: Univ. of Cal. Pr., 1985.
7. 西川滿 (1936.12) 「臺灣顯風錄、十二、媽祖廟」 『臺灣時報』。
8. 西川滿(1959)『人間の星』、東京：六興出版部。
9. 西川滿(1962.11.5)「天中殺の現象」、『人間の星 (1) 』、日本天后会。
10. 西川滿(1963)『天上聖母萬年曆』、日本天后会。
11. ウェーバー .M.(1972)『社会学の根本概念』、清水幾太郎訳、東京：岩波書店。
12. 宮家準(1974)『日本宗教の構造』、東京：慶應通信。
13. 鈴木健太郎(1996)「占い本と近代」、島藺進他編『消費される[宗教]』、東京：春秋社、pp.210-247。
14. 沼尻正之(1996)「日本宗教の文化的特性：近代化と呪術的志向性」、京都社会学年報第4号、京都：京都大学文学部社会学研究室、pp.109-124。

15. 種田博之(2000)「占いの宗教への変容--細木数子の「占い本」を事例として」、『関西学院大学社会学部紀要 84号』、西宮：関西学院大学社会学部、pp.145-155。
16. 大西克明(2007)「宗教的行為の重層関係—現世利益とその宗教的合理化を巡って—」、東洋哲学研究所紀要23号、東京：東洋哲学研究所、pp.87-112。
17. 井上順孝(2009)『人はなぜ新宗教に魅かれるのか』、東京：三笠書房。

